****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 319 号
－環境・農業・食べ物など情報の交流誌－
2011.09.23（金）発行 山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.yamazaki-i.org
**********発行部数 1179 部**********
□ 目 次 □----------
＜巻頭言＞ 『アバター』再考 塩谷哲夫
＜山崎農研会員による著書紹介＞ 野口勲著『タネが危ない』
＜お知らせ＞ 山崎農業研究所所報『耕 No.125』発行されました
＜編集後記＞ 農と食と暮らしの見直しのために
――中島紀一『有機農業政策と農の再生―新たな農本の地平へ』

＜巻頭言＞ 『アバター』再考

『アバター』は 2009 年に公開されたジェームス・キャメロン監督によるアメリカ映画。3D 映像による劇場公開が注目を浴び、世界興業収入は歴代 1 位の 26 億 4000 万ドルだという。

舞台は 22 世紀、地球から 5 光年離れた星パンドラ。この星には多様な動植物が棲む美しい森が広がっており、「ナヴィ」と言う地球人に似た民族が、豊かな自然と共生して暮らしている。

この星にはエネルギー源となる特殊な鉱石がある。地球のエネルギー不足を解決するために、人類が武力を持ってパンドラ星を襲い、ナヴィたち生き物を皆殺しにしても、この鉱石を手に入れようと画策する。一方、ナヴィたちはパンドラの自然と文化を守ろうとして戦いになる。

「アバター」とは、地球人のナヴィ攻略作戦の先鋒を担わせるために、遺伝子操作によって地球人とナヴィを合成した肉体に人間の意識をリンクさせた人造生物だ。アバター役には元海兵隊員の若者ジェイクや女性科学者が任命された。しかし、派遣された彼らは、ナヴィたちの生き方・エコ文化を理解し、親近感を抱くようになる。

地球軍の侵略が決行され、ナヴィとパンドラのすべての生き物群が力を合わせて反撃の戦いに立ち上がった。地球人の愚かな過ちに気づいた「アバター」ジェイクとその仲間たちは、地球からのコントロールを拒否してパンドラ軍に協力し、地球軍（主力は USA 海兵隊）を打ち破って、その企図を粉砕する…。

私は長女にすすめられてこの映画を見たが、正直、見た当初はハリウッドの商業主義の衣をまとった甘い話だと思った。手塚治虫の哲学（『火の鳥』）には敵わないよ…と。当時の評価を思い出してみても、キャメロンの開発した画期的な 3Dの技術システムにばかり注目が集まって、映画のストーリーにはほとんど関心が払われなかったように思う。

ところが、3.11 の原発事故の勃発後の今になって、映画の物語が身近なものとなって思い出されてきた。そうだ、『アバター』の中で地球人が求めようとしていた鉱石は、今、私たちが使っている原発燃料の放射性物質と同じことなのではないか！？　私たちは、自らの生命を危険にさらして、今の、目の前の暮らしのために、原子力からエネルギーを得ているのではないか？

キャメロンは彼なりの方法で、私たちの文明に対して警告を発していたのではないか。私たちは地球軍の側に立つのか、それともナヴィの側に立つのか。3.11 後を考えるうえでそんなふうに自問するのも悪くないかもしれない。

塩谷哲夫
山崎農業研究所幹事・東京農工大学名誉教授
yamazaki@yamazaki-i.org

＜山崎農研会員による著書紹介＞　野口勲著『タネが危ない』

われわれは今、日常食している作物の多くが、その種から子孫を生み出せない不自然な人工品種に代えられている。企業によって、品種改良され、あるいは遺伝子組み換えされた一代のみで、生殖不能にされたタネは世界中の作物を支配している。このタネによって長年受け継がれてきた固定種は次第に影を潜め、生命の持続性が失われ、生態系は大きく変わりつつある。

以前に「いのちの種を未来」を出し、また山崎記念農業賞を受賞された野口

勲さんが、この問題の深刻さを世に訴えるために出版された本である。作物栽培の種を通して、「生命の尊厳と地球の持続性を守る」という大きなテーマがこの本に示されている。

【目次】
第 1 章　タネ屋三代目、手塚漫画担当に
第 2 章　すべてミトコンドリアの采配
第 3 章　消えゆく固定種
第 4 章　F1 はこうして作られる
第 5 章　ミツバチはなぜ消えたか

日本経済新聞出版社発行
四六判、上製、203 頁、本体 1600 円＋税
2011 年 9 月 5 日発行
ISBN978-4-532-16808-7
http://www.nikkeibook.com/book_detail/16808/

＜お知らせ＞　山崎農業研究所所報『耕 No.125』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.125』が発行されました。
今号では、東日本大震災を特集しています。
研究所ホームページから、目次を見ることと、記事の一部のダウンロード（無料）ができます。また、ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。

http://www.yamazaki-i.org

目次（抜粋）
《土と太陽と》（巻頭言）
東日本大震災と農業・農村復興……安富六郎
〔特集〕どう向き合うか 東日本大震災
・被災地を歩いて―災害の被害者から復興の当事者へ……小泉浩郎
・東日本大震災による農地と農業インフラの被災状況……渡邊 博
・土壌の放射能汚染をどう考えるか
　―現場での対応を中心に……編集部・森敏

・エネルギーは社会の根本問題……関 曠野
・震災から森と住まいの文化を考える……大内正伸
・大震災と住民自治……鳥越皓之
・「持続型地域」建設ビジョンをどう描くか……千賀裕太郎
・引き受けるものと選択するもの……宇根 豊

＜編集後記＞　農と食と暮らしの見直しのために
——中島紀一『有機農業政策と農の再生―新たな農本の地平へ』

東京電力福島第一原発事故は、命の糧である食べものをつくる農家に大きな打撃を与えた。そしてその打撃に人一倍ショックを受けたのは、土のことを思い、食べる人の健康を思い、農薬・化学肥料をつかわないで農業を行なってきた有機農業者ではないか。

山崎農研の会員でもある鈴木孝夫さん（北茨城市）は、農民連などが呼びかけた東京電力本社前の抗議行動（4 月 26 日）でこんな発言をされている。

「私は 26 年間、農薬や化学肥料に頼らない農業をやってきました。除草剤も使わないために、はいつくばって雑草と格闘してきました。まもなく 27 回目の稲作がはじまるところです。＼ところが今回、原発の大事故によって、うちの田畑にも放射能をばらまかれてしまったことになります。このとんでもない事態を、どう受け止めたらいいのか。ただとまどっているというのが正直なところです」（山崎農業研究所所報『耕 125 号』「東電、聞いてるかぁ！」より）

この国で有機農業者のおかれてきた地位はけっして安泰ではなかった。農法の問題、売り先の問題など、ひとつひとつの課題を行政からの支援もないなかで、志を同じくするものたちのネットワークを通じて解決してきた。

そんな有機農業者に光があたりはじめたのが 2006 年。この年、超党派の議員たちによる議員立法により、有機農業推進法が成立し、国や県は有機農業を推進することが義務づけられた。本書は、この有機農業推進法が成立する過程、そして成立後どのようにこの法律が機能してきたか、そしていまだ実現されていない領域は何なのか、などについてていねいに記述する。

著者は茨城大学の中島紀一氏。日本の有機農業運動のはやい時期からかかわり、

有機農業推進法の成立にも大きく携わった。中島氏は、有機農業の政策論には「食べもの論的領域」と「産業論的領域」と「社会論的領域」の三者があり、この三者が統合的に推進されることが望ましいが、昨今は、事業仕分けや TPP など新自由主義的な政策論が強まるなか、国の施策は産業論的領域に傾斜しているといい、そのことへの危惧を述べている。

日本の有機農業運動は生産にとどまらず暮らしの見直しを重視してきた。そのことの意味は 3.11 以後、よりいっそう評価されるべきであろう。有機農業には政策論とともに技術論として「低投入・内部循環・自然共生」という 3 つの原理がある。これらの原理は生産の領域にとどまることなく、暮らしの領域にも適用可能な原理、暮らしを見直すうえで欠かせない視点といえるのではないか。

3.11 以後の農と食、そして暮らしのあり方を考えるうえで本書ははずせない 1 冊である。

中島紀一著『有機農業政策と農の再生―新たな農本の地平へ』
コモンズ刊、四六判、並製、208 ページ、本体価格 1800 円＋税、
ISBN 978-4861870804
2011 年 7 月発売

2011 年 09 月 22 日
山崎農業研究所会員・田口　均
yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考――グローバリゼーションの次は何か』
（発売：2008/11　定価：1,575 円 ）
http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/
たくさんの書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）
グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ
http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html
◎戎谷徹也さん（大地を守る会）
ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記　“あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を
http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/
◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）
キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました
http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182
◎関良基さん（拓殖大学政経学部）
ブログ：代替案　書評：『自給再考　－グローバリゼーションの次は何か』
http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0
◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）
ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」
http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive
◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か
http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html
◎森川辰夫さん
NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報
http://www.rircl.jp/shiryo.htm
◎日本農業新聞／書評
（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎小谷敏さん（大妻女子大学）
日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）
http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219
◎白崎一裕さん（（株）共に生きるために）
月刊とちぎ V ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫
http://yamazaki-i.org/
（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）
◎塩見直紀さん（半農半 X 研究所、執筆者）
ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！
立国集。
http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言い

たいことを具体的に。
2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
3、1 回 1 テーマ、10 行位に。
4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

次回 320 号の締め切りは 10 月 03 日、発行は 10 月 06 日の予定です。

＜本誌記事の無断転載を禁じます＞
****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 319 号
最新号・バックナンバーの閲覧
http://archive.mag2.com/0000014872/index.html
http://nazuna.com/tom/denshico.html
購読申し込み／解除案内
http://www.yamazaki-i.org
2011.09.23（金）発行 山崎農業研究所＆編集同人
mailto:yamazaki@yamazaki-i.org
**********ここまで『電子耕』**********